

ア州、ネバダ州、ユタ州、及び首都のワシントンで使節団の地方訪問や見学に対して重要な役割を果たした。DeLong夫人はその時同伴として日本人女子留学生を保護していた。

日本人女子のアメリカ留学について、Daily Evening Bulletinは1月25日に「To the ladies of the Japanese Embassy」という題目でThe State Central Committee of Californiaの代表者の歓迎の辞を發表した。代表者の女史たちはこの挨拶で「In the Name of the Women of America」という名義で日本人女子留学生の到来を歓迎し、「日本とアメリカの女性は、我々が感じているように、日米両国の顕著な変化において、女子教育の向上を目指して互いに励まし合っていくべきであると思う^[18]」と、日本人女子留学生への近代アメリカ女性の期待を示している。

日本人使節が近代女性教育の重要性についてどのように認識したかは2月20日付のNew York Timesの記事「日本使節団」から窺える。報道されたのは、岩倉がDeLong氏のアメリカ私邸を訪れた時の双方の対談と討論である。岩倉は、DeLong邸の上品さと快適な様子という感銘を受け、いくつか質問を始めた。

「あなたの家がこれほどきちんと整頓され、居心地がよいのは、いったいどのようにやるのですか」と岩倉は尋ねた。

「家事は皆家内がやっております」と公使は応じた。

岩倉はこの返答に考えさせられたが、彼はなかなか思慮深い人間で、即

座に核心をつく質問を發し、同様に要を得た解答を引き出した。アメリカの女性は夫とともに公共の娯楽施設へ出かけることを許されており、男性同様の自由を享受していること、この自由の真価を認識できるよう女性は教育を受けていること、をデ・ロング氏は岩倉に語った。アメリカでは、女性は日本でより敬意を表されており、夫に隷属するものではないし、女性が教育を受け、尊敬を受けることはよいことだ、などのデ・ロング氏の言葉を岩倉は思い出した^[19]

岩倉使節団は十ヵ月半にわたって八十四ヵ所のアメリカの教育施設を視察した。その中で、普通教育に関する大学から小学校まで三十九ヵ所が占めているが、実業や女学校に関する教育施設、障害者学校、少年院なども視察した^[20]。岩倉使節団帰国後、政府に提出した調査書である『理事功程』と『視察功程』の内訳は司法省十冊、文部省六冊、大蔵省六冊、宮内省式部寮一冊の各理事功程のほか、各報告の十八冊も加わり、合計四十一冊である。ここで教育視察の重要性が窺える。全四十一冊のうち、最初に上申されたのは、1873年9月8日に文部省田中不二麿（1845-1909）が提出した米国の二巻である。岩倉使節団の教育視察調査書は当時文明の進んだ欧米諸国の教育の知識の啓蒙に大いに貢献したとみられる^[21]。

文部省が1872年8月に頒布した「学制」は、教育行政組織がフランスに、教育内容がアメリカに倣ったということである。学制制定において、お雇い外国人の